

平岩 呂子：1999年度藻類談話会参加報告

藻類談話会が1999年11月13日(土)午後、紅葉の深まる中、奈良女子大学にて開催されました。藻類を材料として研究を行っている関西および中国、四国地方の方々の集まりであった関西藻類談話会が前身であるだけに、今回もこの地方を中心に約40名程の参加者で賑わいました。また前回と同様若手研究者や大学院生による研究発表も行われ、次の時代に向けての躍動を感じさせられる内容となりました。発表者(敬称略)と講演題目は以下の通りでした。

講演 洲崎敏伸(神戸大・理):ユーグレナの細胞運動, 松田祐介(関西学院大・理):緑藻クロレラの高CO₂環境への適応—細胞はCO₂濃度をいかにして感知しているか?, 川井浩史(神戸大・内海域):大阪湾の海藻植生と人工藻場の創出について。

研究発表会 斉藤育(神戸大・理):ペラネマ(ユーグレナ類)の滑走運動について, 後川龍男(京都大・農):大阪湾における富栄養化の指標としての海藻群落。

洲崎先生の講演は、ユーグレナの細胞体の変形運動について、帯状構造によって形成されている細胞表層が互いに滑り合うことによって起こっていること、そしてその運動に膜内在性タンパク質が関与し、その配列パターンの変化に伴って細胞膜が一定方向へ伸展していくという内容でした。私にとっては細胞運動という複雑で捉えにくいところを、お手製のモデル作品を使ってわかりやすく説明して頂きました。

松田先生は緑藻クロレラが細胞外のCO₂濃度に反応して、溶存無機炭素を取り込んでいく仕組みや、その調節機構についてのお話でした。研究がまだ始まったばかりとのお話でしたが、変異体を使った解析等、今後の発展を予感させる内容で、また環境と深く関わる



懇親会でのひとこま

研究という点からも、たいへん興味深く聞かせて頂きました。

川井先生による現在の大阪湾の海藻植生についてのお話は、環境汚染の実態を知る一方で、汚れてきた湾内でも存在し続ける藻類の生命力の強さを感じさせられました。また人工藻場の創出について、数種類の藻類の着生を試みられた結果を報告され、着生という一つの現象もその藻類の性質やまわりの環境条件等様々な要因に依存していることを改めて認識しました。そしてこのような基礎研究が環境改善という点で社会へ還元されるのではないかということを実感させて頂きました。

3人の先生方のお話を伺いして、一口に藻類の研究といっても多岐にわたっていることを改めて知りました。日頃、この分野にふれる機会が少ない私にとってはたいへん興味深く、藻類がいかに不思議で、それらを研究することの重要さと面白さを再認識いたしました。

講演に引き続き昨年から始まった若手研究者及び学生による研究発表が行われ、終了後は別室にて懇親会となりました。私にとっては、初めてお会いする先生方また久しぶりにお会いする先生方と同席でき、非常に有意義な時間でした。また若手の研究者や学生を交えて活発な意見交換が交わされており、藻類の研究が益々盛んになっていくことと期待しております。次回は関西総合環境センターで開催されるということで、今回と同様、そしてまたさらに興味深いお話をお伺いできることを楽しみにしております。

(大阪府高槻市紫町1-1, 株式会社生命誌研究館)



研究発表風景